

# 月報 岡崎の教育 ☆ ☆

1 月 号

昭和63年1月1日  
発行 / 編集  
岡崎市教育委員会

「先生、鳥が窓にぶつかった。  
子らの手の中に  
一羽のシロハラ。」

「先生、死んじゃうの。  
時折り、羽音を立てる。」

「ほら、大丈夫。こんなに動くもの。」

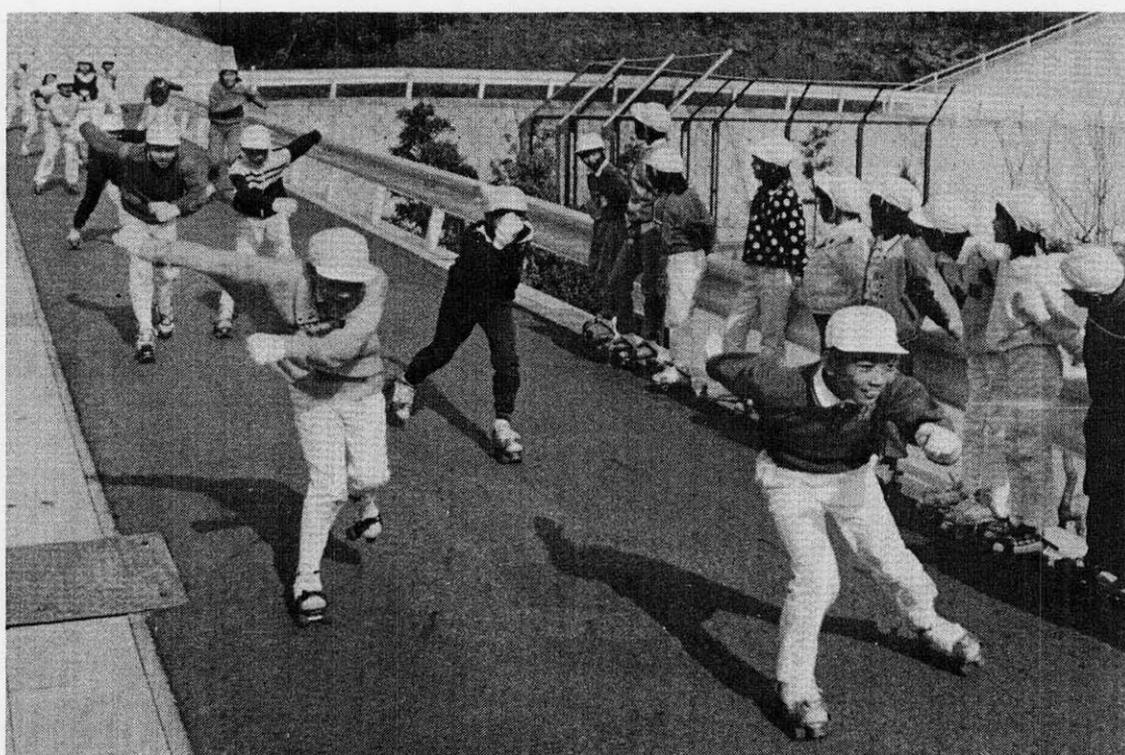
「さあ、飛べるかな。」  
手を、前へさし出す。

やがて、手の中から  
羽ばたき、低く飛び出した。

「あつ。飛んだよ。やったあ。」

一瞬、どの顔もほころびる。  
このひとときに、  
子らの愛の心の育みをみる。  
これからも、この子らと  
愛の出会いを求めぬいま。

〈子らとともに〉



(今年もローラースケートの季節がやってきた — 生平小)

## 一 教育随想 一

## 南極観測にみる

## 人間関係

仲井 豊



私が日本の南極観測隊に参加したのはちょうど十年前になる。そのおりに体験したこと未だに忘れがたいことの一つに、観測隊員相互の人間関係がある。

十二月から一月にかけてが、南極の夏である。夏といっても、平均気温が摂氏零度くらいであるから、岡崎の冬の平均気温よりも低い。野外調査は、南極で氣候が最もよいこの時期に行われる。

私達六名の者は、観測船「ふじ」が昭和基地に近づく頃、ヘリコプターで観測地点へ送り込まれた。昭和基地から、およそ二百二十キロ離れた竜宮岬という所である。他の国がほとんど足を踏み入れていないこの地域に、日本隊として初めて派遣されたのである。約二週間の予定で、海岸に面する東西約十キロ、南北約二キロの露岩地帯を調査した。竜宮岬調査隊の構成は、地球物理一名(40歳)、地質三名(27、31、44歳)、測地一名(31歳)、生物一名(31歳)であり、専門分野

年齢、所属などが異なり、リーダーのみ南極の経験者で、他は未経験者であった。

調査地での生活は、テント三つに分宿し、食事は共同して作り、朝夕は揃って一つのテント内にとった。調査は、分野別ではあったが、単独行動をとることはなるべく避けた。南極では、気象変動が激しく、朝快晴であっても、昼頃には吹雪になることが、よくあるからである。

比較的天候に恵まれ、調査は順調に進んでいった。「ふじ」との通信は、毎朝夕二回行われ、気象状況、行動計画、行動概要などの情報を交換した。しかし、時には電波状況が悪く、通信不能になることもあった。調査期間の後半、撤収予定日が急に早まったため、予定された調査内容をこなすため長時間の行動が連日続いた。この時期、南極では太陽が沈まず真夜中でも天気さえよければ、行動は可能であった。私達は、十日間でほぼ調査を終えることができた。

調査の終了を連絡すれば、すぐにも撤収のためのヘリコプターが飛来するものと期待していた。ところが、気象状態が厳しく、一向に迎える来なかった。荷物を整理し、テントをたたんで待ち、十五分おきに通信をしながらヘリコプターを待った。今日はどうとう迎える来なかったが、明日はどうだろうかと、隊員の気持ちは、少しづついらだたせてくる。日が経つにつれ、ほんとうに迎える来ようかと、不安が募ってきた。

こうした時に、一番大切なのは、リーダーの役割である。信頼されるリーダーであれば、リーダーの指示通りみんなが動き、チームワークは崩れることなく互いに励まし合うことができた筈である。ところが、信頼を失ったリーダーは、もはや、チームを統率することができなかつた。とうとう、リーダーを交代する事態にまで至ってしまった。

このような事態を招いた原因には、いくつかのことが考えられる。

観測隊は、それぞれの研究機関からの寄せ集めでチームが作られるので、価値観や考え方の相違があるのは当然であり、これを埋めるような努力をしなかつたことに、最大の原因があるように思われる。窮地に追い込まれると、ほんの僅かな気持ちのずれが、大きく感じられる。人間理解は、相手の立場をよく考え、互いの努力が必要であることを痛感した。

(愛知教育大学附属岡崎中学校長)



アイデアを生かして

書写指導員

加藤 一彦

「あれーっ。」「おかしーい。」「水だけで、何で書けるー。」「きっと、本当は、墨がついとるだよ。」

H小学校の一年生の書写の授業での歓声である。担任のH先生は、若いが、三年連続で一年生を任されているだけあって、児童の扱いが実にうまい。こみ上げる笑いをこらえながら、すまして、「トン、スー」と左払いを書く。

実は、硬筆の指導で、水書板を使って毛筆で示範しているのである。先生が水でひと書きすれば、たちまち左払いが浮かび上がる。はじめて見る子どもたちにとって、新鮮な驚きである。

低学年の書写の授業では、教師はまず児童の実態を正確につかみ、教材分析を入念に行い、一時間をとおして、意欲を持続させ、効果を上げるにはどうしたらよいか、その手だてを考えなければならぬ。そこで大切なのが、教師のアイデアである。



# 雅楽

石川 清氏

岡崎市には雅楽を奏する集まりはいくつかあるが、文化協会に加盟し、定期的に演奏会を催しているのは岡崎雅楽会だけである。葵博のイベント館で「岡崎市民フェスティバル」があり、そこでの演奏は聞く人に古代のロマンを感じさせた。工業高校の近くにある岡崎雅楽会会長の石川清さんのお宅を尋ねる。昨夜は、月例の研究会が羽根学区市民ホームで開かれ、九時まで演奏練習をされていたという。それなのにお疲れの様子もなく、快く迎えて下さった。

「昨日は豊川稲荷での演奏があったのでいったん家に帰って用事をすませ、七

時に集まって練習をしました。楽人は羽根・上地・矢作・竜泉寺町と分散しています。最近では若い人の入会もあり、親子で参加して下さる方もいます。市外から先生を招いて指導していただくこともあり、昨日がその日でした。」

石川さんは、管楽器の篳篥を奏することに秀でておられる。

「小学校の頃、唱歌を歌うと周りの者に『音痴だ』と笑われたものでした。しかし、青年学校に通っていたときに、今まで笛を吹いていた人が兵隊に行つてしまい、お祭りのお神楽の笛を吹かないかと誘われたのがきっかけです。戦時中のことで、ほかに娯楽もなかったし、神事に関する笛ならだれにはばかることなく自由に吹けるとい嬉しさもありました。でも最初は『この笛を吹いてみる。』と笛を渡されただけで何にも教えてくれませんでした。仕方なしに見よう見まねで、ひと晩吹いてみましたが、全然音は出ませんでした。』

石川さんは、会社勤めをしながら機会あるたびに伊勢神宮、熱田神宮などにも出かけられ雅楽の道に励んで来られた。昨年還暦を迎え会社を退職され、ますます雅楽に打ち込んでおられる。その表れの一つに雅楽の楽器作りがある。

「十年ほど前から笛を作り始めました。もちろん最初からいい物はできません。この頃では、どうやら人に使ってもらえるものが作れるようになりました。」

煤竹に穴を開け、漆を塗り重ね、つり合いを考えおもりをつけ、籐を巻いて仕上げるのに一年ぐらいかかります。篳篥を専門店で買うと二十万円以上します。こんなにならなくては、雅楽を若い人にやっていただくとしても大変です。私の作ったのを譲ったり、お貸ししています。どの道でも言えることです。若くは、若い人は上達が早いのです。ですから、岡崎市の小中学校のどこかで、雅楽クラブをやつて下さると嬉しいのですがねえ。」

自分が作った愛用の篳篥を手にして語られる石川さんの言葉の節々には、若い人に期待する想いが感じられた。

生年月日 昭和二年五月二日  
住所 岡崎市羽根町大池一〇〇



この授業では、児童も絵の具筆を使うことによって、「払い」の筆使いを実感としてつかむことができ、鉛筆で書く場合にも大いに役立っている。

## 心身のほぐしを

保健体育科指導員

鴨下 智幸

音楽を使つての、リズムウォームアップが多く実施されるようになり、準備運動の内容が多様化してきた。エアロビック・ジャズダンスといった、テンポの速い曲のつて体を動かすことが流行の域を出て、一般生活に浸透してきたともいえる。運動量もあり、主運動に対する心肺機能の適応を高めることはもとより、精神面での効用が大きい。曲想に合わせて踊る子供たちの顔は、明るく実のびやかである。

授業の導入段階で、心身のほぐしを行うことの大切さはいうまでもないが、一時間の授業の流れを機能的にし、一人ひとりが生き生きと学習を進めるためには画一的な準備運動にならないよう、方法や内容について吟味したいものである。

既製の動きを、子供たちと練習し踊り込む例、子供の心身の発達状況などを考慮し動きづくりを行った例など、それぞれの実践が貴重でありすぎる。子供たちの躍動する体から、目の輝きから学習意欲の高まりを感じるとともに、子供の先頭に立って踊る先生方の姿にも、率先し没頭する姿勢がみられるのも貴い。

## 新春座談会



# 「学校教育の視点」 を巡って

## 個を生かす指導

和出 年度初めの月報四月号に、「学校教育の視点」が載せられていますが、それをもとに今日まで実践してこられた感想はどうでしょうか。

山内 個の教育の大切さは、新任研当時から思っていますが、実際の子供を前にすると、個に目がいくより、学級全体のまとまりをつけることだけで無我夢中、精一杯で、反省ばかりです。

三浦 私も新任当時はそうでしたよ。他の学級に遅れないようにしていくのがやっとでした。

それから一まわり十何年たって、この頃、やっと一人ひとりの子の気持ちに少しずつ見えだした感じがします。

長谷川 中学校は、教科担任制ですから個を知るといっても、なかなかつかめません。そこで、研究授業への全員参加を始めました。自分の教科から見た子供と他教科での子供の姿を比べて、異なる面を見つけることで、個の全体像をつかむようにしています。

和出 個性重視とか、一人ひとりを生かすとか言われていますが、授業での工夫はありませんか。

長谷川 発問を工夫しています。答が一つしか出ないような発問をしない工夫です。問いに対して、子供はさまざまな思考経路を通して答を出してくるわけで、その経路・過程を認めてやることで、個

を伸ばすことができます。いろいろな答が出るほど、個は伸びます。

いろいろな方法で、いろいろな絵を描く美術などの表現教科は、個別指導には恵まれていますね。

三浦 個を生かす、一人ひとりを伸ばすといっても、各人が活動していればそれでよいというものではないと思います。

音楽で、階名も吹けなかった子が吹けるようになった時、それは充実であり、喜びとなります。しかし、吹ける子がいいかげんに吹いて過ごしたのでは、物足りない一時間になります。このことを考えますと、前に向かって、一人ひとり全員の子に全力を出しきらせること、それが一人ひとりを生かすことだと思いが、なかなかできません。

そのためには、常に少し上の目標を子供に持たせることが大切だと思います。

和出 以前、跳び箱の授業を見ました。子供たちは、各人の目標をもって学習していましたが、授業中、誰もそれを評価する人がいませんでした。評価をしてやらないと、次の可能性へのチャレンジはできません。教師の目の働きが重要になります。

山内 知恵おくれの子に花の絵を描かされたところ、すごく細かくていねいに描いた。画用紙に小さく描いてあったが、学級でほめてやったら、みんなが彼に一目おきようになりました。これがきっかけで、彼も積極性が出てきました。

また、忘れ物の多い子が、ある日、トイレのスリッパを一人で揃えていました。

気鋭の新進から豊熟のベテランまで、出席者

和出 昭夫 (井田小長)

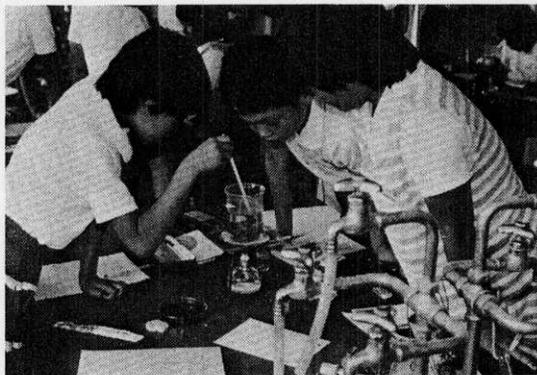
長谷川 晴彦 (河合中)

三浦 洋子 (羽根小)

山内 貴弘 (広幡小)

編集部委員

をもちました。教育の見直し、転換が論議される今日、じっくりと問題を考え、今年の方向を見定めたいものです。



その姿を見た時、自分は今まで、何をしていたかと反省させられました。子供を見ることは、容易なことではないなあと思いました。

## 基礎・基本の徹底

**和出** 子供が主人公であるような授業をしたいと、誰もが願っていますが、子供の興味・関心が中心となった時、たとえ書き順とかいった基礎・基本がおろそかになりはしませんか。

**三浦** 私は授業をする時、私なりにこの子には最低ここまで教えたいという要求があります。

そこで、一時間の目標をノートに書かせ、その子なりの学習の手順を書かせるようにしています。学力面の基礎・基本というのは、問題解決の手順を細かく教えることだと思っております。

**長谷川** 中学校のノートは、板書丸写しが多くて問題です。子供のノートづくりは、個性伸長に役立つよう、学習の基本として研究していかないとけないと思っております。

**編集部** 臨教審では、個性尊重を強く打ち出していますが、個性を發揮させる基になる力が、その前提にあるのではないのでしょうか。基礎的・基本的学力のようなものです。この力は、すべての子供に身につけさせてやりたい。ここに、基礎・基本の徹底が要請されてきます。その指導は、個に応じたものでありたい。ここ

が大切なところだと思えます。

**山内** 極端ですが、四十人の子がいれば四十通りのアプローチが必要になります。そうすると、今の指導案の形は、おかしかなりますね。

**和出** 迫り方は幾通りもありますが、指導案は、目標に到達させる筋道ですから、形式上は、ある程度類型化して書かざるを得ません。しかし、その中で、一人ひとりに応じた指導を工夫するのは、

**三浦** 押さえるべきところは、きちんと押さえた授業をしたいです。一斉学習の中のグループとか個別化とか、いろいろ工夫したいと思えます。

時に、野放しの個性のようなものがあります。人間の生き方で、そうあってはいけないような部分、自分本位とか、わがまま等は許してはいけない部分です。そうした面についても、その子その子によって指導の方法は違うでしょうが、教師は踏んばってやらなければいけないですね。これは、生き方の基礎・基本です。

**和出** 個性というと、肯定的にとらえることが多いが、否定的なマイナスの個性もあるわけです。

今日、価値観の多様化に対応して、教師自身にも迷いが多くなっています。それだけに、一時間一時間の基礎・基本をどう押さえるか。教師が自信を持っていないと、指導が混乱します。

教師の研修の必要性・重要性が、今日ほど大切な課題となっている時は、ないといえましょう。要は教師の力です。

## 辰年にかける抱負

**和出** 個と基礎・基本の問題に話が終りましたが、辰年の皆さん、最後に今年の抱負をどうぞ。

**山内** 先生であるからには、プロの先生でありたいですね。特に、伸び悩んでいる子を伸ばしてやるのがプロの先生だと新任で教えられました。今年だけでなく、ずうっとそうありたいと願っております。プロに向かって全力投球します。

**三浦** 子供と接するのに、ことばが大事だと強く感じています。ことばと心を、どう伝えたらよいか。真剣に取り組んでいかなければいけないと考えています。

それから、リズムが大切だと思っております。緊張と発散のリズム、そうしたリズムのある授業を実践することに、私の課題を見つけています。

**長谷川** 現任校は小規模校ですので、その利点を生かして、一人ひとりの生徒をいろいろな面から見つめて、生徒の良さを見つけ、ほめてやれる先生になるよう努力します。

**和出** 東井義雄さんのことばに「燃えさし」というのがあるが、「燃えさし」でも明るさがあるんだと、最後までがんばります。

敬いあい愛しあえるような教師であり生徒でありPTAであるよう、三者一体の信頼の溢れた学校づくりをめざして、我が身を正していく決意です。

## 教育日々



## 遊びの天才

根石小

佐々木俊輔

「明日の両親学級では、みんな  
でブーメランをつくります。」

の声に、

「ワァーイ、やったあ。」

「はやく作りたい。」

と、いっせいに歓声があがり、

大騒ぎ。子どもたちは、明日の

ブーメラン作りをたのしみに下

校していった。

そして翌日。教師の説明もそ

こそこに、早速、お父さん、お

母さんといっしょにブーメラン

をつくりはじめた。

バルサ材を紙やすりで磨く

ので、教室の中はほこりだらけ

になったが、子どもも親も真剣

そのもの。いつもなら、すぐに

飽きてしまう子ども、今日は様子

がちがう。目がすばらしく輝い

ている。

「できた。」

という誇らしげな声と、

「飛ばしていい。」

という催促の声が交錯して、で

き上がったばかりのブーメラン

を、教室や廊下で飛ばしはじめ

た。

「とばないよ。」

「もどらないよ。」

と、はじめは、なかなかもどつ

てこなかった。が、やがてこんな

声があちこちからあがってきた。

「力を入れて投げてももどつて

こない。」回転させて投げると

上手に行く。」「投げ方は上から

投げても、下から投げてもどち

らでもいい。」「投げる時はなな

め上ぐらいがいい。」「風にのせ

ると上手に行く。」「端をもつて

丸く上げるともどる。」「等、つぎ

つぎに飛ばし方のこつを覚え、

上手にとばしはじめた。まさに、

子どもは遊びの天才である。

翌々日、朝から、子どもたち

の話題は、まだブーメランのこ

とでいっぱい。

「お父さんと投げあつこやつて

ぼくの方が上手だった。」

「公園で飛ばしていたら、よそ

のおばさんがほめてくれた。」

と、入れかわり立ちかわり話し

たい。」

の声に、大歓声がわきおこり、

つぎの日、だれのブーメランが

よく飛んで、うまくもどつてく

るのかを全員で競い合うことにな

った。



## いも掘り

美合小

和出 恵子



「先生、まだ草とりやるの。」

「暑いから、もうやめようよ。」

「暑くても、しっかり草を取っ

とかなきゃ、大きなさつまい

もができないよ。がんばって

取ってる子もいるんだから、

がんばろうよ。」

と、なだめすかしたものの実に

暑い。立っているだけで、汗が

首筋を伝わってくる。耐えられ

ないのは、正直言って私自身だ

ったのだ。

あれから五か月。待ちに待っ

たさつまいも掘りの日が、やつ

て来た。子供たちは、それぞれ

軍手をはめ、右手には大きなビ

ニール袋、左手は移植ごてを持

つて、期待に満ちた顔をして、

美合つ子農園へと向かった。

農園につき、いよいよも掘

りが始まった。

しばらくすると、あちこちで

こんな声が聞こえる。

「わあ、こんな大きいも、な

かなか抜けないぞ。」

「まだまだ出て来るよ。後から

三つも四つも。」

美合つ子農園に湧き上がる歓

声は、いつまでも止まない。と

ころが、歓声とは対照的に、こ

んな声も聞こえてきた。

「わたしの所、いもがないよ。」

「掘っても掘っても、おいもな

んか見つからないよ。」

と、泣き出さなばかりの表情

である。かわいそうになつて、

「この茎の根元をずつと掘っ

て行ってごらん。きつと出て

来るよ。」

気持ちになつて、子供に話す。

「あつ本当だ。あつた、あつた。

さつまいもが見えてきた。」

そんな声を聞いて、ほっと胸

をなでおろした。

さつまいもをビニール袋に入

れて持ち帰る道すがら、M子が

「先生、みんなで草を取つたり、

水をやつたりしたから、さつ

まいもが、こんなにとれたん

だね。」

と、言った。つるをさしただ

けで、五か月後には、大小様々

なさつまいもの収穫ができた。

このことは、子どもたちには、

自然の成し得た妙技としてしか

映らないだろうと思つていたが、

M子の心の中には、あの夏の日

の思いも、去来したのであ

つた。



お知らせ



第21回県教育論文優秀賞

梅園小 小倉 教諭  
大門小 兵藤 教諭

愛知県教育委員会・同教育振興会主催の第二十一回県教育論文入賞者の表彰式が、去る十二月二十五日に県教育委員会教育長室で行われた。

本年度は、個人研究三百九十九点、共同研究百四点の応募があった。岡崎市関係入賞者は次の通りである。

【個人研究】

▽優秀賞 小倉敏幸(梅園小)

「問題意識に支えられた理科学習」

▽低学年理科のあり方とその可能性を求めて一

▽優秀賞 兵藤鋭子(大門小)

「運動する楽しさを追求する体育の指導」

▽低学年における課題追求過程

【寄贈刊物・資料等】

◆創立四十周年記念誌「葵」

変形B5 一〇三ページ 葵 中

◆研究・実践「教職三十年のあゆみ」

変形B5 一五六ページ 豊嶋典明

▽佳 作 増澤 徹(小豆坂小)

「意欲を持ち、自ら調べ追求する社会科学習をめざして」

▽佳 作 松井幸彦(小豆坂小)

「子どもの成長に果たす自然観察の役割」

▽緑化委員(体験学習)の指導を通して一

【共同研究】

▽佳 作

六ツ美中部小作品評価部会「文章表現力を高める作文指導」

▽佳 作

六ツ美中国語部「形成的評価を有効に取り入れた効果的な説明的文章の授業」

■東書教育賞論文で山本教諭、(東海中)が優秀賞

昭和六十二年第三回東書教育賞論文において、「効果的な

英語指導のあり方を求めて」と題した東海中山本悟教諭の実践記録が優秀賞に選ばれた。表彰式は十二月十三日、東京で行われた。

■岡崎市教育論文の応募状況

昭和六十二年度の岡崎市教育論文募集は、去る十二月一日に締切られた。応募総数は、四百七十四点、個人研究三百八十八点、共同研究八十六点であった。教科別の内訳は次の通り。

(小学校)

- ・国語 五十五・書写 七・社会 四十六・算数 二十五・理科 四十二・音楽 七・図工 五・保健 三十・家庭 五・道徳 七・特活 三十四・特殊 十・視聴覚 四・図書館 五・保健 十一・生活指導 二・教育全般 十六

(中学校)

- ・国語 十五・書写 一・社会 十五・数学 十七・理科 十二・音楽 九・美術 三・保健 十八・技家 十五・英語 八・道徳 三・特活 二十四・特殊 四・視聴覚 四・図書館 一・保健 二・生活指導 六・教育全般 六

■岡崎市自作OHP・TPP作品百十四点の応募

昭和六十二年岡崎市自作OHP・TPP作品の募集と、その審査が終了した。

本年度の作品応募点数は、幼稚園 二園より二点、小学校 二十三校より六十九点、中学校 十二校より四十三点、小中合計 三十五校より一四四点の応募があった。

審査の結果、幼稚園 二点、小学校 三十七点、中学校 二十一点、あわせて六十点の作品が入選と決まり、県自作OHP・TPPコンクールへ応募した。入選者は次の通り。

(幼稚園)

- ▽梅園幼稚園(藤井つね他三名)
- ▽広幡幼稚園(菊川三他六名)

(小学校)

- ▽六南小 浅井近・斎藤敏子他三名
- ▽井田小 森竜師・天野道晴
- ▽梅園小 小栗浩子
- ▽大門小 松浦由美 河合美智代
- ▽本宿小 金原恵子
- ▽連尺小 八田敏公
- ▽秦梨小 今枝武司・犬塚健一
- ▽山田和子
- ▽大樹寺小 東忠・柴田弘子

三木世紫枝・岡本知子・山本健治・柴田靖子・吉田章二

▽男川小 鈴木かおる・本多末子

▽岩津小 江坂良夫

▽矢南小 高井幸子・高橋啓三

▽六名小 倉地均

▽岡崎小 香村敏之・米津典子

▽上地小 河合友子・青山静夫

▽大沢峰 松野加代子・土屋恵子

▽矢東小 田島広嗣・向井伸ひとみ・坂田修子

▽美合小 荻須文裕

▽常東小 島津江万喜子

▽六ツ美中 原田平

▽東海中 杉山隆之

▽矢作中 伊藤直也・竹内昭博

▽常磐中 山田賛平

▽美川中 小林直美・渡辺誠・長島かよ子・山本信夫・高木和広

▽甲山中 野々山宏司・長坂洋人・山田佳宏・杉田吉男・大和文子・加藤博史

▽南中 上原健次・内藤広光

▽城北中 犬塚尊夫・小林俊元

▽矢北中 渡辺総意

なお、入選者の表彰は、県コンクール結果発表後に開かれる岡崎市視聴覚教育賞表彰式席上で、代表者に渡される。

